

とらだより

第 3 号
平成19年5月
瑞宝山 不動寺
TEL75-4862

2月24日 今日世間話に花が咲きました。それは、人が人生の後半に入ってくると「捨てる」練習が必要だということです。こんな笑い話があります。ある男性の人生は「金、銭、カネ、ゼニ」の一生でした。若くして大金持ちになることを望み、ただ唯金儲けのために必死に働き続けました。ついには周囲の人々から「金の亡者」「あの人はカネしか頭にない」などと言われるようになりまして。しかしこの金の亡者も寄る年波には勝てず、自分が動けなくなってきた頃に、儲けたお金も、手に入れた高価な品々もすべてこの世に残していかなければならないことに気づきます。何一つとして手に握りしめていくことができないことに気づくのです。そこで周囲の人々に「最期に、金の亡者と呼ばれたわしにもみんなに伝えたいことがある」と言って家族にこう言い残します。「わしが死んだら棺には両脇に手が出るように穴を開けてくれ。そこからわしの手を出してくれ。そうしてみんなに伝えたいのじゃ。わしは金の亡者とまで呼ばれたが、これこの通り何も手にしないであの世に行く。生きている内に人に喜ばれるようなカネの使い方をしてほしいのじゃ。上手に捨ててくればよかった。」

葬式の日、約束通り棺の両脇に穴を開け、手を出した姿でみんなとお別れをしました。果たして故人の遺言通り、受け取ってくれたのでしょうか？



残念ながら、お別れをした人たちから話された言葉は、「金の亡者だけあって、死んでもまだ金が欲しいようで、棺から手を出していたなあ」でした。

とくにお金に関して「捨てる」事はできませんが、でも寺や神社に投げ入れるお賽銭は捨てることを練習していることにほかなりません。しかも捨てるのですから「いくら」捨てたのか忘れてしまう必要があります。

今日の御弥津（おやつ）は阿富留（アップル）パイでした。

3月24日 彼岸のお話しです。お釈迦様が出家をしたのが29歳の時です。そして35歳で悟りを得て仏陀となります。この6年間は苦行の連続でした。なかでも6年目の修行は50日に及ぶ断食行でした。身体は骨だけにやせ衰え、立っているのもやっとというくらいの状態でした。この時釈尊は「苦行をやり遂げるということは死を意味する。死んでしまっただけは私を得た、苦を取り除く真理を人々に伝えることができない。苦行は捨てる。」と言って、ネーランジャー河で沐浴をし、水から上がってきた

ところで村娘のスジャータから乳粥をいただき体力を回復していくのです。ちなみにこの乳粥が栄養たっぷりだったので明樂という乳製品の会社がコーヒーミルクの名前を「スジャータ」にしたのだとか。（今日の御弥津は白玉団子）

いよいよ座禅を組んで悟りを開かれた釈尊は、まずはじめに「人は苦行だけではだめだ。放逸（楽しい）のときも必要だ。いわば道のなか程を歩くことが大切なのだ。右にも左にも偏らない、とらわれなきこだわりなき中道こそ大切なのだ。」ということを感じます。

この中道の生き方を伝える方法が、昼と夜の時間が同じ春と秋の中日を彼岸として、今も私たちの生活の中で、体感的に教えようとしているのです。だからお彼岸は先祖供養が第一ではなく、人としてなか程を歩くことを考えさせているのです。今日も写経に熱心です。



4月28日 今日は初めての方が2名参加してくれましたので、般若心経の解釈の復習と写経が行われました。以下は皆さんのようすです。



御弥津はみんなからの差し入れてし

